松波むかし語り　ここに住み続けて　その54

今回のお客様

昨年から公民館の管理人をつとめる

稲川（いながわ） 万里子（まりこ）さん　2丁目

“楽しく、どなたも気軽に来れる公民館になるよう努力したいと思っているんです。”

60歳以上の方なら、「キューポラのある街」という映画(公開は1962(昭和37)年)をご存知でしょう。埼玉県川口市の鋳物の街を舞台に、中学3年生の女の子の目を通して、当時の町工場の街の暮らしを描いたヒット作品で、吉永小百合の出世作とも言われました。キューポラとは、コークスを燃料として鉄を溶かす溶解炉のことですが、稲川さんはその川口の鋳物工場の長女として生まれました。「映画の景色はとてもなつかしいです。家は祖父の代からの工場で、だるまストーブを造っていました」。弥生小は当時、冬の暖房はすべてだるまストーブでしたから、ストーブを造る工場は活気があったに違いありません。

工場の中に自宅があるという暮らし、大人数の食事もそうですが、「鋳物は砂を使う仕事ですから、下着なんか洗ってもねずみ色が落ちなくて」と、当時を振り返ります。稲川さんはのち、お祖父さんが県会議員になるとその秘書のような仕事をし、その後20代の半ばに都内で結婚します。工場はやがて昭和60年代に閉められましたが、それは、川口が鋳物工場に代わってマンションの街へと変ぼうする歴史そのままのようです。

「松波へはどうして？」とうかがってみました。「父がたまたま稲毛に転居して、千葉大の中などを散歩してたのでしょうね。『西千葉のあたりは静かでいいぞ』と言ってくれたのがきっかけです」。稲川さんは最初、西千葉駅の反対側、春日町に住み、そこから7年前、松波に越してきました。「父は、私が松波に住めたのをとても喜んでくれました」。

稲川さんは、去年の6月から週3日、1月号で紹介した齋藤さんと交代で公民館の管理人を務めています。「ある方から、『家に閉じこもってないで、外に出てエネルギーをもらったほうがいいよ』と声を掛けていただいたんです」。公民館の仕事はどうですか？とお聞きすると、「マニュアルがありませんし、行ってみないとその日何があるかわからない仕事ですが、公民館に来ることが楽しいです」。人あたりのいい印象の稲川さん、「たくさんの方が公民館に集まってきてほしいですね」と語るのは、子ども時代、大勢の人の中で暮らしていた経験からでしょうか。「子どものころは『八百屋さんでしょ？』なんて、商売をしている家に見られてました」。根っからの人好きな笑顔がのぞきます。

町会活動についてうかがうと、「ごみ問題一つとってみてもたいへんな仕事で、みなさんボランティアでけっこう苦労される部分もあるようですが、活気があって男の人も女の人も生き生きしてますね。私のほうは、料理などここで教わることが多くて」と……。

「事務的な仕事はしっかりこなそう」と心に決めている稲川さんに、町会への要望をうかがってみると、「いま社協の子育てサロンや老人会もあって、小さなお子さんと若いお母さん、お年寄りは来られるのですが、小中学生も集まる場であってほしい」という声が返ってきました。この春、中学生になったお嬢さんがいて、3月の「作品展」には、共同製作のガラスびんなどを出品しました。趣味は編み物とか。ものづくりは血でしょうか。(た)